



Contents

141

2026.2

1. 巻頭言	1	4. 次期会長選挙について	7
2. 私にとってコミュニケーション学とは	3	5. 事務局報告	8
3. 学術局からのお知らせ	5	6. 広報局便り	10
ジャーナルに関するお知らせ		7. 支部ニュース	12
大会に関するお知らせ		8. 編集後記	15

日本コミュニケーション学会事務局

連絡先 <http://jcal971.com> 06-6624-0027 jcal971@jcal971.com

〒545-0021 大阪市阿倍野区阪南町1丁目50番3号(CR-ASSIST内)

卷頭言

自由に考えるための盾

花木 亨（南山大学教授）

JCA ニュースレターの巻頭言を執筆する機会をいただき、光栄に思ってい

ます。私が日本コミュニケーション学会の存在を知ったのは、アメリカの大

学院を修了した頃のことですので、もう 20 年ほども前のことになります。

アメリカでコミュニケーションの勉強と研究を始めた私は、日本のコミュニケ

ーション学者のみなさまやコミュニケーション関係の学会について、ほと

んど何も知りませんでした。帰国して日本の大学で働くことになり、何らかの形で日本コミュニケーション学会のことを知り、これに入会しました。年次大会では、自分にとっての母語である日本語で展開される

緻密な議論に初めて触れ、感銘を受けたのを覚えています。学会誌に掲載されている論文の質も高く、自分

にこのような論文が書けるのだろうかと身が引き締まる思いがしました。日本コミュニケーション学会は、

日本におけるコミュニケーション研究を牽引する学会だと思いましたし、今でもそう思っています。

こうして昔を振り返っていたら、自分はなぜコミュニケーション研究を続けているのだろうか、あらためてコミュニケーション学はどういう学問だろうか、という問い合わせが浮かんできました。答えるのが難しい問い合わせだと思いますが、それらしい答えを一つ思いつきましたので、紹介させてください。

私がコミュニケーション研究を続けている理由の一つは、コミュニケーション学が自分の好きなことについて好きなように考えることを許してくれることにあるのではないかと思います。学生たちに「コミュニケーション学って、一言で言うと、どういう学問ですか」と聞かれたとき、「文化、政治、メディア、人間関係など、私たちを取り巻くさまざまな現象について、コミュニケーションの視点から考える学問です」と答えるようにしています。私たちは「コミュニケーションしないわけにはいかない」のだとすれば、コミュニケーション学者は自分に関わるすべてのことを研究対象にしてよいことになります。つまり、コミュ



ニケーション学者を名乗っていれば、好奇心の赴くままに、多様な事柄について、自由に思考することができます。これは興味の対象が変わりやすい私にとっては、ありがたいことです。

コミュニケーション学が領域横断的な学問分野であることは、この文章を読んでくださっている方たちの研究の多様性を見てもわかります。学問が細分化、専門化されていく中で、コミュニケーション学は学問分野の壁を意識することなく、自由に思考することを私たちに許してくれます。その意味において、コミュニケーション学には「自由に考えるための盾」としての側面があるように思います。飽きやすいところがある私が飽きもせずにコミュニケーション研究を続けられている理由の一つは、このあたりにあるのではないかと現時点では考えています。



私にとってコミュニケーション学とは

友池 梨紗（愛知淑徳大学）

みなさん、「恋バナ」はお好きだろうか。私は大好きである。好きすぎて、人様の恋バナに耳を傾けながら「現代日本の未婚者はどのようなコミュニケーションを重ねて交際関係を築いているのか」を探り続けて、気がつけば10年が経っていた。そんな私にとってコミュニケーション学とは、「いかなる人間関係もコミュニケーションの副産物である」という視点を与えてくれた学問である。

私がこの学問と出会ったのは、大学1年次の春、西南学院大学で宮原哲先生の「コミュニケーション学入門」を受講したときであった。「英語を話せるようになりたい」という理由で大学に進学した私にとって、「コミュニケーションを学ぶ」という発想は未知のものであった。しかし、宮原先生の授業には私たちの日常に即した具体例が数多く盛り込まれており、それらを手がかりに自分自身のコミュニケーションを見つめ直すうちにコミュニケーション学にすっかり魅了されていた。とりわけ、「私」を形づくる根本には他人とのコミュニケーションがあるという視点を得たときには、視界がぱッと広がるような感覚を覚えたものである。

大学4年生になり、宮原ゼミに所属した私は、研究テーマを決める事になった。そこで思い浮かんだのが、2年次の夏から参加した交換留学先のアメリカでの経験である。アメリカで恋人ができた私は、交際の進み方がそれまで日本で見聞きしてきたものとは大きく異なることに戸惑いを覚えた。「恋」や「愛」は万国共通のものだと思っていたが、「文化が異なれば交際に至るまでのコミュニケーションプロセスも違うのではないか」、そうした疑問が生まれた瞬間であった。この経験をきっかけに、私は恋愛を研究テーマに選び、卒業論文では日本の恋愛コミュニケーションの大きな特徴の一つである「告白」に焦点を当てて調査を行った。



大学院進学後も宮原先生ご指導のもと、恋愛の研究を続けた。調査を進めるなかで、かつて日本の皆婚社会を支えていた見合い結婚や職縁結婚が衰退し、交際の起点となる「出会い」のあり方そのものが大きく変化していることを知った。博士論文ではこの「出会い」に着目し、交際相手との出会いの形がその後のコミュニケーションプロセスにどのような影響を及ぼすのかを論じた。例えば、学校や職場といった日常生活のなかで出会う相手とは、日々の会話を通じて徐々に印象形成が行われる。一方で、マッチングアプリや街コンなど交際を目的とした場で出会う相手に対しては、理想の恋人像を当てはめながら互いを踏み込む傾向が強まることが示唆した。

こうした気づきに至るまで、宮原先生から何度もかけていただいた言葉がある。それは、「関係が生じてからコミュニケーションが始まるのではない。人びとがコミュニケーションした結果として人間関係が生まれる。つまり、人間関係はコミュニケーションの副産物なのだ」というものであった。この言葉は私の研究姿勢の根幹を成している。

いわゆる「自然な出会い」が減り、自ら行動して「出会い」を作らなければならなくなっている現代において、コミュニケーション学の視点はこれまで以上に重要である。なぜなら、いかなる人間関係もコミュニケーションの積み重ねによって成立するものであり、コミュニケーションなしに関係を語ることはできないからである。一人ひとりの恋愛観や結婚観も、他者とのコミュニケーションを通して形づくられていくことを考えれば、「恋バナ」も非常に重要なコミュニケーションの場だと言える。私は、これからも人様の恋バナに耳を傾けながら、日本の恋愛コミュニケーション研究に貢献していきたい。

余談ではあるが、このような研究を行ってきた私は、大学院時代、マッチングアプリ、友人の紹介、街コン、合コンなど、さまざまな出会いの場に自ら足を運んだ。その数々の出会いの一つが、現在の夫との出会いである。夫は当時、自分も研究対象の一人なのではないかと警戒していたそうだ。今回選んだ写真は、そんな夫との間に生まれた息子と西南学院大学を訪れた際の一枚である。自分が9年間通った場所を息子とともに歩くことができたことは、私にとって大変感慨深い経験であった。

学術局からのお知らせ

ジャーナルに関するお知らせ

2026年1月に『日本コミュニケーション研究』(Japanese Journal of Communication Studies)第54巻第2号が発行されました。お手元に届くまで少しお待ちいただければと思います。現在は、第55巻第1号(2026年7月発行予定)の準備が進められています。また、**第55巻第2号(2027年1月発行予定)**の原稿を募集しております。締め切りは、**2026年3月31日(火)**となっております。変更等が生じた際にはホームページに掲載いたしますので、最新情報をご確認のうえご投稿いただきますようお願い申し上げます。

ご投稿の際には、ホームページにある最新の「研究論文集投稿規程」「学会誌執筆要項」をご参照いただき、投稿資格や研究倫理、書式等をご確認のうえ、ご投稿いただけますようお願い申し上げます。ご提出は、ワード等で作成された(1)「論文」、(2)「シノプシス」、(3)「著者情報およびファイル作成に使用した機種等の情報」の3つのファイルをメールに添付して、ジャーナル専用メールアドレスに送付するという形でお願いいたします。メールアドレスは以下の通りです。

To: journal[@を入れる]jca1971.com

上述したメール投稿で受領の返信がない等の不具合、また、ジャーナル投稿に関するその他のお問い合わせにつきましても、ジャーナル専用アドレスまでご連絡ください。可能な限り迅速に対応いたします。

皆さまのご投稿を心よりお待ちしております。

(副学術局長：ジャーナル担当 内藤 伊都子)

大会に関するお知らせ

すでにメーリングリストやホームページにご案内していますように、日本コミュニケーション学会第55回年次大会日程は、2026年6月6日（土）・7日（日）の両日に決まりました。会場は二松学舎大学（東京都千代田区）となります。本大会のテーマは、「東アジアからのコミュニケーション研究：西洋パラダイムの多元化に向けて」です。

○ 大会シンポジウムおよび基調講演

現代のコミュニケーション研究は、その理論的基盤の多くを西洋的な思想やパラダイムに依拠してきました。しかし、グローバル化が深化し、異なる文化的背景や価値観が複雑に交錯する現代社会において、こうした単一的な理論枠組みのみでコミュニケーション事象を捉えることの限界も、次第に明らかになりつつあります。本大会では、東アジアにおける思想・文化・社会的実践の知を参照点としながら、コミュニケーションという営為を多元的に捉え直すことを目指します。

基調講演者としては、中国思想を専門としつつ、西洋哲学・比較哲学にも深く通曉されている中島隆博氏（東京大学東洋文化研究所教授・所長）をお招きします。本大会の開催校である二松学舎大学は、漢学塾としての創立以来、漢学・中国思想研究の長い伝統を持っています。本大会の開催校としての知的伝統とも強く響き合う中島氏の講演は、コミュニケーション研究に新たな理論的視座をもたらすものとなることが期待されます。

講演テーマは、

「中国思想から捉え直すコミュニケーション研究の可能性（仮）」
を予定しています。

基調講演を受けて開催される大会シンポジウムでは、複数のシンポジストによる論点提起をもとに、学際的観点から「コミュニケーション研究の基盤をいかに拡張しうるのか」をめぐって討議を行う予定です。シンポジストの詳細は現在調整中であり、確定次第あらためてご案内いたします。

○ 学術局企画セッション

本大会では、基調講演および大会シンポジウムに加えて、**大会テーマを別の観点から掘り下げる学術局企画セッション**の準備も進めています。こちらも現在調整中で、確定次第、順次ご案内いたします。基調講演・シンポジウムと呼応しつつも、それぞれ独自の問題設定をもった議論の場として、大会全体の知的厚みを高める企画となる予定です。

多くの会員の皆さまのご参加を心よりお待ちしております。

（副学術局長：大会担当 谷島 貴太）

次期会長選挙について

2025年11月30日を期日に各支部、及び、会員の皆様に次期会長候補者の立候補、及び推薦を募っておりました。その結果、1名の推薦がございました。推薦のあった候補者については、3月の理事会にて審議を行う予定です。



事務局報告

事務局からのご報告とお願い

1. 会費納入のお願い

納入がお済でない方は、お早めにお振込みくださいますようお願い申し上げます。

2. シニア会員への切り替え

65歳以上の会員は年会費が5,000円となる、シニア会員への切り替えが可能です。新たに65歳の誕生日を迎えた方は、以下のリンクからお知らせいただきか、学会問い合わせ窓口までご連絡ください。<https://forms.gle/Qdnd6AdH1j52gHmj9>



3. 複数支部選択方法

会則第14条で、「原則的にその居住区に基づいていずれかの支部に所属する」とあります
が、居住地や勤務地に関わらず、希望する支部に最大2つまで所属することができます。それ
ぞれの支部活動の内容などを参考に、所属を希望する支部を選択いただき、活発な学会活動にご協
力いただけますと幸いです。現在の支部に追加して、他の支部への所属を希望される場合は以下
のフォームよりご連絡ください。<https://forms.gle/yxEzi8FUrCAEDVmp8>



4. 各種変更手続きについて

住所や所属等に変更がある場合は、変更フォームにてお知らせください。HP にも変更届フォームのリンクがございます。<https://forms.gle/ySCfHPQMoFLzxwvb7>

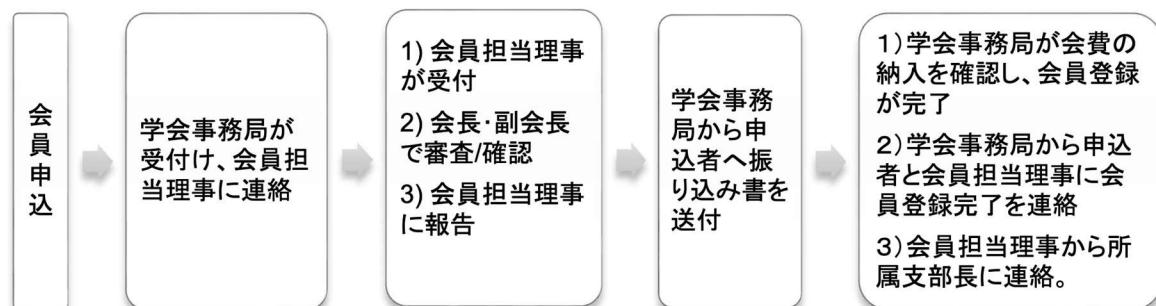


5. 新規会員の手続き

JCA では新しい会員を随時受け付けています。下記のような流れで、新規会員の手続きを行います。ご不明な点がありましたら、学会問い合わせ窓口までご連絡ください。

皆様のご協力をお願い申し上げます。

【会員申込から会員登録完了までの流れ】



学会問い合わせ窓口 連絡先

〒545-0021 大阪市阿倍野区阪南町 1 丁目 50 番 3 号 CR-ASSIST 内

日本コミュニケーション学会

メールアドレス : jca1971[@を入れる]jca1971.com

電話番号 : 06-6624-1127 FAX : 06-6624-0027

広報局便り

1. 新刊情報提供のお願い

広報局としては、会員の皆様の新刊情報を学会公式 X[旧 Twitter](@jca_1971)および ML で発信・配信していくたいと考えております。また、今後学会ホームページで会員の皆様のご著書を積極的に紹介していく予定です。自薦、他薦を問わず、新刊のご著書に関する情報—ご著書名、出版社、ISBN 情報—をお寄せいただきたく、お願い申し上げます。ぜひ、ご検討ください。

※学会ホームページに記載されている「基本方針」に合致しないものに関しては、学会公式 X 等での発信をお断りする場合がございます。ご了承下さい。

<http://jca1971.com/keynote>

2. 広報局からのお知らせ

- ① 広報局では ML をもちいて、学会 HP における掲載情報を中心に会員の皆様あての情報配信をおこなっております。
- ② 広報局では各支部や各研究会の情報、他学会や教員公募などの情報も、ホームページにアップロードしていきたいと考えております。ぜひ、情報を寄せください。アップロードする文面については、タイトルを含めて完全原稿をご準備ください。
- ③ 皆様からも、国内だけでなく、海外の学会を含めて関連する講演会や研究会があれば情報として広報局までご一報下さい。ホームページにアップロードしたいと思います。アップロードする文面については、タイトルを含めて完全原稿をご準備ください。
- ④ ホームページ (<http://jca1971.com/>) は、適宜更新しております。ご意見やご質問を頂ければ幸甚です。
- ⑤ JCA 公式 X[旧 Twitter](@jca_1971)も適宜更新しております。是非フォローをお願いいたします。

(広報局長 小西 卓三)

JCA ニュースレターへのご寄稿のお願い

日本コミュニケーション学会では、ニュースレターへの会員の皆様のご寄稿を募集しております。

以下の要領で奮ってご寄稿ください。宛先：田島慎朗 (tajima-n[@を入れる]kansai-u.ac.jp)

① 著書紹介

会員の皆様の著書を紹介するコーナーです。自薦、他薦を問わず、会員の皆様の著書をご紹介ください。和文・英文で1枚程度（A4）の原稿を受け付けております。

② コラム：コミュニケーション教育

コミュニケーション教育に関する実践報告、事例紹介、展望、論考、その他のエッセイを受け付けています。和文・英文で1枚程度（A4）の原稿を受け付けております。

③ NL 表紙の写真

ニュースレターの表紙を飾る写真を募集しております。本学会のNL表紙に相応しい写真がございましたら是非お寄せください。（写真は、会員の皆様ご自身でお撮りになったもの、または版権をお持ちの写真に限ります。また、写真内容が法令に触れないようご配慮ください。）

支部ニュース

東北支部

(支部長 宮曾根 美香)

東北支部では 2025 年 12 月 13 日(土)に第 26 回研究大会を開催しました(オンライン)。参加者は 9 名でした。基調講演の後、研究発表 4 件と支部総会がありました。

【プログラム】

- 13:00~13:05 開会の言葉
東北支部長 宮曾根 美香 (東北工業大学)
- 13:05~14:05 基調講演 「ソロ化と幸福感」
金井 辰郎 (東北工業大学
ライフデザイン学部 経営デザイン学科教授)
- 14:10~14:40 研究発表 1
「オブジェクト指向のコミュニケーション教育—
いじめ・不登校を減らす試みとして—」
小島 正美・宮曾根 美香 (東北工業大学)
- 14:40~15:10 研究発表 2
「子どものウェルビーイングについての一考察」
宮曾根 美香 (東北工業大学)
- 15:10-15:40 研究発表 3
「医療通訳者と遠隔通訳および AI 通訳の共存につ
いて」
川内 規会 (青森県立保健大学)
- 15:40-16:10 研究発表 4
"Communication Education and the Growing
Literacy Crisis in Japan"
Eli Walgrave (東北大学・宮城学院
女子大学他 非常勤講師)
- 16:20~16:40 支部総会
- 16:40-16:45 閉会の言葉
東北副支部長 小林 葉子 (岩手大学)
- 今回は経済学という異分野の研究者 (東北工業大学 金井 辰郎教授)を基調講演者としてお招きし、今日的および将来的な課題ともいべき「ソ

ロ化と幸福感」についての知見をいただきました。また、新会員による研究発表もあり、新鮮かつ活気がありました。2026 年春には定例研究会(オンライン)を開催する予定です。「海外研修引率を通して触れる異文化理解」というテーマで會澤 まりえ先生 (尚絅学院大学名誉教授) から話題提供があり、その後ラウンドテーブルディスカッションに移る予定です。その他、2 件の研究発表と支部総会も予定しております。

関東支部

(支部長 田島 慎朗)

関東支部は、この度運営委員の間で運用される会員向けのメーリングリストを再開させました。ここ数年学会運営をしていただく業者の方々が何度も変わりましたが、それ以前に使っていたメーリングリストを復活させたというかたちです。メーリングリストを支部で運営するという決断は、以前よりいくつか起こっていたメールの送受信にともなうトラブルを最小限に抑えるという目的があります。登録希望の方は、田島慎朗 <tajima-n[@をいれる]kansai-u.ac.jp>までご一報ください。また、メーリングリストのアドレスである<caj-kanto[@をいれる]googlegroups.com>の受信を許可する、あるいは迷惑メールに振り分けない設定をよろしくお願ひいたします。

また、2025 年度は、運営委員が忙しく活動出来ていない状況です。大変申し訳ございません。今後、支部長が関東にいないという事情もありますし、なるべく多くの方に積極的に支部活動に関わっていただけますと嬉しく思います。まずは手始めに、来年度二松学舎大学で行われる年次大会にご発表または見学をお申込みいただき、そこでご挨拶できましたらうれしく思います。どうぞよろしくお願ひいたします。



関西支部

(支部長 日高 勝之)

関西支部では、2025年度関西支部大会を2025年11月8日(土)に関西大学梅田キャンパスで開催しました。支部大会は、「コミュニケーション/コミュニケーション学に関する『日本』を考えるために、私が薦めるこの一冊」と題して、ビブリオバトルをアレンジした形式で参加者にご自分が薦める一冊をあげて自由に語り合ってもらう試みを行い、延べ10名の会員・非会員の皆様にご参加いただきました。会場には、初めて参加した非会員や大学院生もいて大いに盛り上がり、その後の懇親会も含めて大変実り多い大会となりました。

【2025年11月8日 2025年度関西支部大会】

【日時】 2025年11月8日(土曜)

14:30～17:10

【場所】 関西大学梅田キャンパス 702号室

【大会テーマ】 (コミュニケーション/コミュニケーション学に関する) 「『日本』を考えるために、私が薦めるこの一冊」

【プログラム】

14:30-14:50 支部総会

15:00-16:00 「私が薦めるこの一冊／一本」
第一部

16:00-16:10 休憩

16:10-17:10 「私が薦めるこの一冊／一本」
第二部

17:30～ 懇親会(会場近くの梅田駅周辺)

今回の研究会では、「コミュニケーション・ビブリオバトル」という企画で、コミュニケーションの理論や実践に関して、「日本」を考える上で、是非とも推薦したい書籍を口頭で紹介し合う内容で、事前の指定発表者だけでなく、幅広い参加者に自由に発言して頂きました。参加者が挙げた書籍は、日本人のコミュニケーションの特質を理解するのに良い一冊、日本の歴史、政治、社会

におけるコミュニケーションの問題を考えるために良い一冊、さらには現在の自分の研究活動の契機やヒントになった、日本(人)に関する一冊など、多種多様な内容で、熱のこもったそれぞれの発表後の質疑応答も活発に行われ、刺激的な場となりました。関西支部では、以前もビブリオバトルをアレンジした企画を支部大会で実施したことがあります、意見や質問が開放的な雰囲気の中で活発に飛び交う点で、まさしくコミュニケーションに相応しい空間になったと思います。今後もテーマを考えながら、折を見て実施することができればと考えております。

なお、関西支部では、春期研究会を2026年3月28日(土)に、関西大学梅田キャンパスで開催することを決定いたしました。大会テーマや詳細については、HP、NL等でご案内いたしますので、皆様、是非ご参加ください。



九州支部

(支部長 清宮 徹)

九州支部では、2025年度の第32回九州支部大会を、11月29日(土)に沖縄産業支援センター(沖縄県那覇市)において開催しました。大会テーマを『コミュニケーション力 再考』として、基調講演は宮原哲先生(西南学院大学)による「「コミュニケーション力」って何?～今さら聞けない、でも知りたい!」というタイトルでお話しいただきました。JCAの会長を務め、コミュニケーション学に多大な貢献をされた宮原先生ですが、2026年3月で定年退職となります。九州支部としては、ぜひともこの機会にお話を聞きしたく、基調講演をお願いしました。これまでの研究と教育のご経験から、多岐にわたるお話を聞くことができました。



▲基調講演の様子

また本大会ではいくつかの新しい試みを行いましたが、その一つはポスターセッションの開催です。基調講演に先立ちまして、五十嵐紀子先生(新潟医療福祉大学)と吉村美路先生(愛知東邦大学)のお二人が、とてもきれいに掲示されたポスターを前に、会場の参加者と自由に質疑応答し、議論を深めました。長所短所ありますが、対話性の高いポスターセッションの方法を行うことで、自由な雰囲気中で深い理解が進み、同時に建設的なフィードバックが行われ、建設的な意見交換が行われました。支部として、とても大きな経験値を得ることができました。



▲ポスターセッションの様子

研究発表は、塙幸枝先生(成城大学)、黒瀬菜々先生(西日本短期大学)、仲里和花先生(沖縄キリスト教学院大学)、河村まい香先生(明治大学)、上土井宏太先生(熊本大学)から発表をいただき、活発な質疑応答が行われました。最後

には、パネルディスカッションが開催され、「“大学院生×コミュニケーション学”の現在地と今後の展望」と題し、発表と意見交換が行われました。友池梨紗先生(愛知淑徳大学)が司会を務め、川野さん、相澤さん、郭さんの3名の院生の発表と意見交換が活発に行われ、とても充実したセッションになりました。その中で、改めて「コミュニケーションとしての学会」の意義が明確になりました。

本大会の重要な試みの一つは、スタディツアーです。「開催地に根差した学びの場」を設けるのも一つの学会の在り方という考え方のもと、戦後80年を考える重要な機会として、沖縄での戦争を振り返る「語り部スタディツアー」を、翌日の30日(日)に開催しました。仲里和花先生に企画立案をいただき、実行することができました。語り部のお話を聞くことにより、単に見て廻る以上のリアリティが生まれ、戦後80年の沖縄の歴史の一端について理解を深めることができました。

▲スタディツアーの様子



今回は戦後80年の沖縄での開催という深い意味もあり、有意義な大会となりました。大会運営の点では、大会実行委員長と開催校を置かずに、地域で利用可能な施設において開催したことによる長所といいくつかの問題点も明確になりました。今後の九州支部大会開催にとって有益なものとなりました。

他の報告として、九州支部活動の柱の一つである支部紀要『九州コミュニケーション研究』第23号が9月末に発行され、現在、第24号の募集を受け付けております。みなさの投稿をお待ち申し上げます。さらに、新編集長の黒瀬菜々先生によ

る九州支部『ニュースレター』が発行されましたので、ぜひご覧ください。年2回発行の予定で、新しいニュースレターが近く発行される予定です。

これら支部大会や紀要、ニュースレターは、九州支部ホームページ (<http://kyushu.jca1971.com/>) にて閲覧可能です。

連絡先

〒545-0021 大阪市阿倍野区阪南町

1-50-3 (CR-ASSIST 内)

日本コミュニケーション学会事務局

06-6624-0027 jca1971@jca1971.com

編集後記

ニュースレター2月号をお届けいたします。原稿を作成いただきました皆様方には、重ねて御礼申し上げます。早いもので、2026年ももう一か月すぎ、二月になってしまいました。2026年に入ってから北海道から本州まで寒波に見舞われ、寒い日が多く大変かと思いますが、会員の皆様におかれましてはそんななかでも研究・教育活動に勤しんでいらっしゃると思います。6月の年次大会では、また多くの皆様とお目にかかる 것을楽しみにしております。

広報局 ニュースレター担当 田島 慎朗